

空手道詳説（1）

序 章

1 動機その一

今まで空手道に関する記述は断片的には書いてきたけれど、まとまったものを書き遺すことなどは正直のところ思いもしなかった。理由として、自分にはその作業をする情熱が今まで欠乏していたことと、後に触れる和道流空手道開祖の大塚博紀先生（1892～1982年。以下、「大塚先生」と記す。）の比類なき著書があるのに、私ごときに何ができるものかと思う気持ちがあった。

それでもよくよく考えてみれば、これまでの後進指導の中で積み重ねた工夫は、私の独自・独創的なところ少なからず存在すると自負している。自らの体験から導き出したものであるから、遅播きながら書き残すべきと思う心境に至った。

内容として考えているのは、空手道の概要、練習の方法論、適ったトレーニング法、技法や理論の構成、心理面の作用にも触れたいつもりでいる。

更に、日々の練習や指導の中で、今もって新たな発想が浮かび出ることがある。その発想とは、私の60年にわたり空手大好きで歩んできた経験が下地となって誘発されるのだろうと思うのだが、『こんなことが、今まで何で気付かなかったのだろうか』と感じる時さえあって、ほとんど自然発生である。

他には、若き日のような動作や行動は不可能にも拘わらず、未だに現役選手と対等に練習できるのでなかろうかという錯覚が続いているのも、思い付きの原因になっているかもしれない。

生まれ出た発想について、記憶に止めようと思いつつも私の頭脳は許容量が決まっているらしく、二つか三つ位は記憶に残り指導に活用できても、古いものから順に押し出され忘却の彼方に飛び去ってしまう。

この繰り返しは高齢のせいからかと嘆きながら、有効な発想が消え失せてしまつては勿体ない。文字にして残さないことには、何時の日かゼロになってしまう不安に苛まされている。

そんな理由をもって今月より作業を開始するが、私に与えられた余命は何時までなのか判らないので、完結に至るかどうかわからないけれども、とにかくにも後々に残す作業に取り掛かろうと腰を上げた次第である。

2 動機その二

私は昭和30年(1955年)11月、初段審査を受けるため審査日の6日前に山形大学空手部(当時は空手道部でなかった)の同期生2人と共に上京した。経済的事情から旅館には泊まれないので、頼りにしたのは山形大を1年で退学し東京の私立大学に入学している友人で、銀座「歌舞伎座」に近い裏小路に間借りしていた彼の所に転がり込んだ。私は20歳、しかも初めての上京である。

後に経緯は詳しく述べようと思うが、練習に参加させてもらったのは神奈川県(横浜市神奈川区六角橋)の空手部で、参加して3日目に大塚博紀先生がお出でになって対面が叶い、お言葉を頂き指導を受けることできた。

幸いに審査会で合格した私たち3人は、東北地方大学生初の和道会初段となった。

段位制度に関して説明しておくが、元来空手道には段位制度はなかった。最初に段位を取り入れた、沖縄県人学生寮であった明正塾(現:文京区水道橋)を本拠地として空手指導を行っていた船越義珍師で、大正13年(1924年)に初段免状を発行したのが始まりである。講道館柔道の創始者・嘉納治五郎氏と親交のあった船越氏が柔道の段位制度に倣ったもので、その後時を経て、各流派とも稽古の進捗状況に応じて段位認定を行うようになる。但し、在来武道(幕藩体制以前から存在した武術種目)の偉大な影響下における新参の立場を思量して、空手界は長く5段位を最高段位としたので、昇段は5段までの実技審査と、推薦段位により行われていた。

各流派共に8段までの高段位を認許するようになるのは、昭和41年(1966年)前後からで、全日本和道会空手道連盟も大塚先生の推挙によって8段まで認証する制度を取り入れるようになる。

私の場合なら、昭和39年(1964年)29歳で推薦5段、同じく43年に推薦6段、46年(1971年)推薦7段であった。

大塚先生は昭和57年(1982年)1月29日90歳で逝去されるが、その2年程前から先生と高弟との間で意見の食い違いが生じていた。

大塚先生の没後、続いていた紛争が原因で組織は二分してしまい、「和道流空手道連盟」(以下、「和道流連盟」と記す。)と「全日本空手道連盟和道会」(以下、「和道会」と記す。)と、それぞれ独自の歩みを辿ることになる。

和道流連盟の方は、ご子息の次郎氏が最高師範を継ぎ二代目宗家として襲名した。技法の中核となる柱を失った和道会の方は、その年の6月「中央技術本部」の設置を理事会で承認して集団指導体制へと進み、明治大学OBの丹羽峻一氏(1926~99年)が初代本部長に就任し、私も指名されて中央技術本部の一員となった。

中央技術本部は、年に3回ほど会議と合同練習会を行い技法の統一見解を求めて討論し、指導の一貫性を図ろうと模索していた。技法の他に議題となったのは、高段位8段までの実技審査と、範士、教士、錬士という称号の制定であった。

最初の高段位審査会は昭和59年(1984年)3月28日に実施され、私は8段位第1号合格者となった。併せて48歳4ヶ月の最年少記録保持者でもある。合格通知書には、丹羽審査委員長から便箋7枚に及ぶ書簡が添えられており、私の実技内容に対する所見と今後の課題が記されており、最後に「和道空手を実現している要素の度合いを量り、最

初の合格者として認定した」とあったので、以後の認定基準につながった可能性もある。

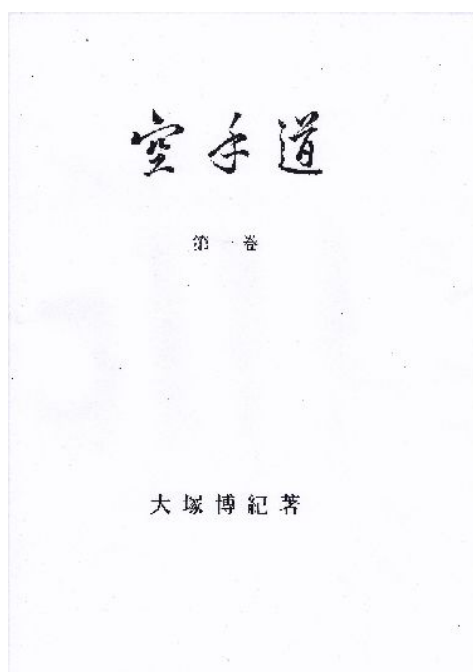
合格第1号となった原因を察するに、一緒に受審し6段位第1号合格者となった崇武館本部・横山 弘氏（現7段、崇武館師範代の一人）の存在は大きかった。私たち二人が受審へ向けて練習を開始したのは前年12月初旬からで、審査日まで休まず夜11時まで4か月近い練習を継続したので、心身の鍛錬に大きな影響を残すことできたと思っている。若さ故に可能であった、価値ある期間を過ごせたと今もって確信している。

このような経験を踏まえ、大塚先生との出会いから、30年前の受審時を顧み、今日まで空手道を継続できた関係各位の支援に感謝し、初心に戻って執筆してみようと決意した。

3 大塚博紀先生の著書



大塚博紀先生



空手道第一巻の表紙

和道流空手道開祖の大塚先生は、明治25年（1894年）6月茨城県下館市に生れ、大正11年（1922年）から空手道を船越義珍氏（1868～1957年、松濤館流の開祖）に師事し、昭和9年（1934年）に事実上独自の歩みを開始し、昭和13年（1938年）に和道流空手道を創始した。

先生は2冊の著書、「空手道」第一巻と第二巻を上梓されている。両巻ともに絶版となり今は新本の入手はできない。

古今の空手道に関する著書の中で、私はこの2冊の著書に関して、他の書物と比較できない趣を異にする文体と構成内容であると思っている。勿論、他書の善し悪しの問題ではないので、実際に目を通してみないと分からない相違点であって、幼少時から柔術を始めとする武道（武術）を学び、真髓を極め、修業に明け暮れた武道家としての精神と思想に満ちていること感じ取れる。

大塚先生が著書「空手道」（第一巻）を発刊されたのは昭和45年（1970年）8月で、先生78歳の時である。門弟たちが渴望していた待望の著書であり、例えるならバイブルのような存在である。

「空手道」第二巻は、昭和61年（1986年）11月の発刊で、それは死後4年10か月を経過していた。

勿論、第一巻の時だって準備期間があったはずで、数年を要したこと容易に想像できる。また、先生のお側でお手伝いしたのは東京大学拳法会（東大空手部OB会）の面々で、実際に作業に携わった人から直接聞いた話である。しかし、読んで察するに、文章には他者の手は入っていないことも確実である。

大塚先生の著書が晩作であることに乗るつもりはないし、とても比肩できるはずもない。しかし、私は先生の著書を真似るのではなく、雲上のお手本として念頭に置く気持ちだけは失いたくない。

4 集団指導体制と技術委員会

「動機その2」の中で、昭和57年大塚先生の没後に、和道会は中央技術本部を設置し集団指導体制へと歩みを進めたと書いた。

大塚先生の生前は、技術や心構えなど全てが先生の言葉一つで決まり、門弟たちは教えるのとおり踏襲した。疑問点が発生すれば、先生にお尋ねすれば答えが得られる。次の段階へと進みたいなら先生にお願いすれば、度合いによっては配慮していただけたので、大塚先生は最高師範であるとともに絶対的な存在であった。

大塚先生のような立場を堅持できる人は、少なからず天才的な武道感覚の持ち主であるとともに、全幅の信頼を得られる選ばれた人間である。逝去によって大黒柱を失えば困惑し混乱するのも仕方のない現象である。

創始者であるとともに絶対的な指導者を失った和道会は、技術指導を保持するため集団指導体制を採用したのは苦肉の策で、それは次善の選択と見ることができる。何時かは必ず訪れる世の習いである。

先生の死後約30年間続いた中央技術本部は、平成24年度の和道会理事会の議を経て、中央技術本部に替えて技術委員会を設置する規約改定を行い、荒川 通委員長（日本大学OB）、石塚 彰副委員長（東京大学OB）以下12名の委員をもってスタートし、私は技術相談役に退いた。失礼な言い方を許していただきたいが、技術指導と年齢は無関係とするのに異論はないが、委員長及び副委員長ともに就任時の年齢は80歳を超えている。

今年度から技術委員会は本格的な活動を開始し、6月8～9日には「平成25年度第1回全国技術講習会・審査会」を山形県総合運動公園剣道場を会場にして開催している。

この中央技術本部から技術委員会へと規約改定による移行は、名称と組織形態は変わっても、集団指導体制の難しさは今後も続きそうに感じている。

それに、講習会で受講者が真に求めているのは何か。一方的な伝達でなくもっと会員が求めているところに近づく、いわゆる「ニーズに応える」を最優先とする方策を検討すればよいのではと思うところがある。

(公財)全日本空手道連盟(以下、「全空連」と記す。)制定の第一指定形・第二指定形の16の中には、和道系(和道流)の形が4つ含まれている。指定形は、各種大会(競技会)の形種目における形の選択と密接に関わってくる。技術委員会への移行前のことだが、『指定形ではそのような動作と解釈されているが、中央技術本部が主催する講習会では、和道流本来の動作とその解釈をもって、指定形と一部一致しない指導を行うことがある。』などの齟齬を来していた。

大塚先生のような絶対者の場合は、口を開けば全て正当であって、他者が異論を挟む余地はあり得ない。数多い門弟の中で優れた資質と認識を持つ人であっても、絶対者となることを組織が認めない限り仕方がない。本部長とか委員長という立場は、人選が変われば別人となるため、これは仮の指揮者でしかない。

指導者が身体で教え言葉で語っても、受け止める側が同じ感覚で捉えるとは限らないという難点もある。「人は十人十色」(好みや考え方など、人それぞれ異なる)というから、人によって受容する傾向や特性も様々あるのは当然で、一様に伝承されるものではない。ましてや世代を重ねるならば、伝わり方は一層異なってくる可能性がある。

また、武道の世界には「守破離」(別項で取り上げる)という言葉があって、教えを受けた後に新たな観点や工夫によって差異が生じる。それを抑えるなら個性を潰す結果となりかねない。

大塚先生の言われたように、技(あるいは業)は時々刻々と変化するので、工夫と変化が進歩につながることなど考えれば、技法伝承の考え方と流会派の維持存続や運営については、相当に複雑かつ深遠な配慮が求められそうに思う。

5 以下の進め方

私の空手道指導活動の範囲は、今は居住する山形県が主で、広げてみても全国技術講習会で講師の一人として座に加わる程度である。

大塚先生から直接教わった時間にしても、首都圏の門弟に比べれば大きく引き離されている。しかし、私は「一を聞いて十を知る」気概をもって先生に接するとともに、色々な人たちを真剣に観察する心得を失わなかった。今に至れば、指導する少年たちの行動からだって学ぶところ沢山あると思っている。

大塚先生は、私が46歳の時に亡くなられた。我が身を振り返れば、34歳で第1回世界空手道選手権大会の審判員に選ばれ、翌年35歳で念願の道場を建設し、40歳に入った頃は、大塚空手を理解しようと懸命であったが、それは自分の思考の範囲(頭の中)でしかなかったと後々反省した。理由は、大先生の空手を理解しようなんて無駄で他愛ない論理でしかなかった。

『和道空手を理解している。その全てを正確に教わっており、私の言うことは全て正しい』と公言する人がもしいるなら、私はその言葉は信用しない。何故ならば、他者の全てを理解するなんて神様以外できない芸当で、和道空手に追随している私たちなら、大塚空手を真似ているに過ぎないのでなかろうか。

大塚先生が没して2年2か月後の昭和59年(1984年)3月、私は48歳4か月で実技8段位合格となったのは、端的言うならば大塚空手、和道空手の一部を真似事して、そ

れを審査員が認めてくれた結果だと思っている。

その後、山形県下で開催することになった第47回国民体育大会（べにばな国体）が近づき、空手道競技会成功に向けて専念しようと思い、平成元年に中央技術本部員を辞任したので、その後再就任するまで同本部から20年ばかり遠ざかっていた。

この間、自分が思う和道空手を愚直に守り通したものの、勿論これでよいという境地には至ってはいない。

これから続く文章も中途半端であること間違いなさそうで、誰かから異論をもって否定されることあったとして、それでも我が信じる言葉をもって綴りたい。

必要に応じて写真も掲載するつもりであり、全てが自己責任なので、高齢ながら自らをモデルにする場合が多くなりそうである。

また、各章各項の内容に順不同が発生するかと思うが、それぞれの時点で書きたい事柄を優先するので、悪しからず容赦いただきたい。

(つづく)